

『キリストを証するもの』ヨハネ5：30-40

5:30 わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えですのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである。

5:31 もし、わたしが自分自身についてあかしをするならば、わたしのあかしはほんとうではない。

5:32 わたしについてあかしをするかたはほかにあり、そして、その人がするあかしがほんとうであることを、わたしは知っている。

5:33 あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわしたが、そのとき彼は真理についてあかしをした。

5:34 わたしは人からあかしを受けないが、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。

5:35 ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたは、しばらくの間その光を喜び楽しもうとした。

5:36 しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっと力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えになったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父のわたしをつかわされたことをあかししている。

5:37 また、わたしをつかわされた父も、ご自分でわたしについてあかしをされた。あなたがたは、まだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない。

5:38 また、神がつかわされた者を信じないから、神の御言はあなたがたのうちにとどまっていない。

5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。

5:40 しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようとしなさい。

○序論

イエスさまは、ご自分の方から「わたしは神である」と公言して回ったという記載ではありません。ただイエスさまご自身が神としての御自覚を持っておられました。

イエスさまは同じヨハネ福音書内で「わたしは〇〇です」、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことができない。」（ヨハネ14:6）と言われます。

ご自分が父と表現する神との特別な関係にあることを示しています。

そこには、イエスさまと父の間に何をなさるのにも一致があるということです。

そうして、今日の最初の言葉がわかります。（現代訳聖書読みます）。

：30 わたしは天のお父様の子ですから、自分の意志では何もしません。天のお父様の御心のままに裁きを行います。その裁きが正しい証拠は、天のお父様の御心のままに行うところにあります。

イエスさまを通して神さまの御心に目が開かれる。神さまご自身を見ることが出来る。

このヨハネの14章9節では「わたしを見た者は、父を見たのである」と言われる。まさにイエスさまを知る事、本当の意味でイエスさまを人生に迎える時、わたしたちは

そういう感動を経験をできる。いやし続けることができるのです。

●本論

I. 人による証

:31 もし、わたしが自分自身についてあかしをするならば、わたしのあかしはほんとうではない。

イエスさまがご自分のことを偽って語っている…というのではありません。それは法的に有効な証拠にならないからだ、ということです。そして言われます。

:32 わたしについてあかしをするかたはほかにあり、そして、その人がするあかしがほんとうであることを、わたしは知っている。

そこでまず、イエスさまはあのバプテスマのヨハネの名前を出します。

:33 あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわしたが、そのとき彼は真理についてあかしをした。

これはヨハネは、イエスさまを指して「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と証言したことを示します。それは、真理を示す大切な証言でした。

ただ、イエスさまは、それは人の証言ゆえに十分ではないことも示されました。

現代訳) :34 とは言っても、わたしは人間の証言を今必要としているではありません。わたしがここでバプテスマのヨハネのことを言っているのは、あなたがたが救われることを考えてのことです。

確かに、人の証言では十分でないかもしれない。しかし、人々に信頼され注目されてきたヨハネの証言は、「あなたがたが救われるため」に有益である語るのです。

わたしたちの経験でもそれは知っています。

たしかに人の証言は完全・十分ではないかもしれませんが。けれどもその言葉や変えられた姿がどれほど、周囲の人々への良き証しとなっていたか、がわかります。

それはまさしくイエスさまを指し示す道しるべの役割を果たしています。

II. 神による証

その一つは、イエスさまのなさったわざ、その働きでした。

5:36 しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっと力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えになったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父のわたしをつかわされたことをあかししている。

この「わざ」と訳される言葉は通常、働き、仕事、労働を意味する言葉です。

つまり父なる神さまが、イエスさまにお与えになった働き、それは奇蹟も含め、神さまと思いを一つにするすべての働きのことを意味しています。

イエスさまはのちにやはりユダヤ人たちに向かいこう言われています。

ヨハネ10:37-38

:37 もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。

:38 しかし、もし行っているなら、たとえわたしを信じなくても、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。

そしてもう一つの証し、それは父なる神さまご自身です。

5:37 また、わたしをつかわされた父も、ご自分でわたしについてあかしをされた。あなたがたは、まだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない。

すでに神さまご自身が、イエスさまがキリストであることを証言している。

ただ、それこそ神から遣わされた御子イエスさまを御自身の姿と言葉でした。だからこう言われるのです。38節を現代訳聖書で読みます。

:38 そればかりか、その御言葉をあなたがたの心に留めてもいませんね。それは、天のお父さまが遣わされたわたしを信じないからです。

先週上げた御言葉をもう一度お読みします。

Ⅱコリント3:14 (LB)…今でも、聖書が朗読される時、ユダヤ人の思いには、厚い覆いがかかっているように思えます。というのは、聖書のほんとうの意味を知ることも、理解することもできないからです。この覆いは、キリストを信じて初めて取り除かれるのです。

神さまがくださったイエスさまのわざも、またその言葉も、イエス御自身がキリストであることを示す道しるべなのです。そして聴くわたしたちは、心を開いてすなおに「アーメン」と信じるところから、本当のキリスト理解が始まるのです。

Ⅲ. 聖書による証

5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。

5:40 しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようもしない。最近の礼拝の中で聖歌196番には、聖書そのものがいのちではなく、いのちを語る文（ふみ）であること。聖書は救い主イエス・キリストを指し示す道しるべであると表されています。

以前ユースの野外キャンプで聖書を座布団代わりにし、「聖書は神さまじゃないんだから、尻に敷いてもかまわないだよ！」と入った青年がいたそうです。

皆さんは、どう思いますか？ ある意味正解。でもその態度は間違っています。

「聖書は神さまではない」。確かにその通りです。

聖書を祭るということも、聖書を神的存在として礼拝することはありません。

当時のユダヤ人たちが持っていたのは、わたしたちが旧約聖書と呼ぶものです。

彼らは、その文字面に心がべったり囚われて、それを知っている自分しか見えず、その結果、この聖書が示すキリストを無視するという過ちに至りました。

とは言え、聖書を尻に敷くような、そのことばへの敬意が失われると、イエス・キリストもまた見えなくなる。神さまのことばが、座布団程度でしかなくなってしまおう…という風にも感じるでしょう。 聖書はこう語ります。

ローマ10:17 したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。

今日、聖書を通して、キリストの言葉そのものが、わたしたちの心に信じる心と呼び覚

まし、わたしたちの心の目をキリストに向けてくださるのです。

これはキリストを示す「道しるべ」です。

そうしてわたしたちは、本当の救い主に目が開かれ、今まで見えなかった救いの世界を経験するのです。

最後に)

AGバイブルアカデミーの序文に、こんなエピソードの紹介がありました。

昔、ある船長が南国のとある美しい島の港に船をつけました。その島の住民は、かつて食人族でしたが、今ではとても友好的で貿易に興味を持っていると。

その船長が島の首長と話をしていると、首長の手に大きな聖書があることに気づきました。船長は少し笑いながら、こう言いました。「まさかその古い本を信じていませんよね？ それは時代遅れで、誰の益にもなりませんよ。」

首長は、船長に向かってゆっくりと答えました。「船長さん、あなたはこの本が何の役にも立たないとお考えかもしれない。でも、あなたのためになっていることにお気づきでないようだ。もしこの本がなければ、今頃あなたは私たちの料理鍋の中にいるのですから！」

この村は変えられていました。キリストによる十字架の赦しと贖いを知り、いのちの希望を受け取ったからです。

これが「救い」です。本当の意味でキリストを知ることです。その感動を、クリスチャンになったからもう終わりではなく、いよいよ聖書を通して経験して、これからも心から「アーメン」と答えて目が開かれていく感動を経験する者でありたいと願います。